

まえがき

この本は社会言語学についての入門書として企画された。大部分の読者にとって、社会言語学という学問に触れるのは初めてと考え、前提の知識なしに、読めることを目指した。

従来の社会言語学の概説書の多くは、取り上げる対象や分野に偏りがあった。そこで、本書では、社会言語学という学問の全体が論理的に分かるような体系的な枠組みを採用した。この枠組みでは、変異を扱う方向と談話を扱う方向を組み合わせ、かつ地表上に広がる面積の大きさによって配列したので、個々の現象を一定の研究分野に位置づけることができる。本書全体として大から小へ向かうという流れ、ストーリー性がある。世界全体を見渡す大きな視点から話が始まり、一言語の中の方言差や性差、集団差、敬語、文字のように、個人の使い分けの話になり、個人のことばの並べ方に移っていく。従来の社会言語学概説書と違うところは、言語相対論を冒頭におき、文字についての独立の章を設けたこと、談話についてしかるべき位置を与えたことである。

従来の概説書では学問全体の構成が分かりにくかったが、本書の枠組みは、図書館や自宅の本の配列にも役立つ。図書館の十進分類法 NDC (第 10 版) では、「801 言語学」の中の「801.03 社会言語学 [言語社会学]」と位置付けてあるが、著者名と購入順でなくその内容によって並べたいときに、応用できる。漏れなく配列できるはずである。十進分類法の発想を生かして、第 0 章から始める (中も 0 節から始める) とすれば論理的だが、「ゼロから始める」のは、書籍には無理なようなので、1 章だけ 0 節から始めている。

本書は大学生向けの教科書として企画し、10 章に分けた。1 学期 15 週、1 年 30 週と考えると、興味・関心に従って、1 章に 2～3 時間かけることができる。【推薦図書】と【調査の課題】が入っているので、さらに詳しく自主的に学習することもできる。各章の執筆に際しては、基本課題を簡潔に紹介し、エッセンスをもれなく記述するように企図した。索引の語のかなりは基本的な術語にあたる。社会言語学各分野のエキスパートによる最新情報を

踏まえたまとめなので、研究者にも必須の文献と信じる。

一般の人が読んでも役立つと考える。単に抽象的な理論を紹介するだけでなく、実用性もあり、読み物としても面白く、読み通せるような本を企図した。扱われている具体的現象は身近なもので、日常生活で「なるほど」「そういういえばある、ある」と思いつくはずである。

文献引用の形式は、社会言語学の実践的問題だが、最新の様式を採用した。現状を見ると多様で、時代による変化がある。本書のように人名の漢字をアルファベット順に並べるのには、慣れていないかもしれない。英語学では20世紀末期から普及しはじめたが、日本語学では五十音順がふつうである。綴りはヘボン式を採用し、シ shi ジ ji ズ zu チ chi ツ tsu フ fu などを用いる。アルファベット順に並べるとしても、中国・韓国の人名は複雑である。NHKのように相互主義をとって、中国語については漢字音読み、韓国語については韓国語読みを採用する方針もあるが、時代による正書法の変化があるし、本人が英語綴りを決めた例もある。李 (Ri Li I)、任 (Nin Im Yim)、朴 (Boku Pak Park) などが典型だが、本書では章ごとの文献目録にしたので、目立たない。文献の使用言語によって大きく分ける方式もあるが、同一人物の著作が分かれる。レポートや卒業論文で引用文献を並べるときには用心して、「アルファベット順」「五十音順」などと目録冒頭に記すことを勧める。また単行本は『 』、論文は「 」で囲むことを勧める。そのようにしないと、教員(の専門分野)によっては、とまどうこともあるからである。

この本を足がかりにして、身近なことばへの関心を持っていただきたい。社会と言語の関係を、新鮮な見方によって、読み取ることができるだろう。社会の中でのことばの多様性を通して、新しい見方を身に付けていただければ幸いである。そして、現代社会で役立つことばの効果的な使い方、理想的な対人関係の形成も含めて、本書が実践的な言語使用に役立つことを祈る。この本が少しでも好奇心をかきたて、将来に役立てば幸いである。

2022 (令和4) 年 10 月 13 日

井上史雄

田邊和子

目 次

まえがき	i
------	---

第 1 章

社会言語学の枠組み 動向と展望

井上史雄 ……1

0 社会言語学とは	1
1 第 1 分野 社会と言語の関係 (第 2 章)	4
2 第 2 分野 言語の変異 (第 3 章～第 8 章)	5
3 第 3 分野 談話の規則 (第 9 章)	10
4 第 4 分野 談話と変異 (第 10 章)	14
5 社会言語学の研究動向	16
6 まとめ 社会言語学の位置	20

第 2 章

言語と社会の規定関係

堀江 薫 ……23

1 言語と社会・文化	23
2 言語相対性・言語類型論の観点	25
3 社会言語類型論の観点	31
4 日本語と社会の規定関係 (日韓の相違)	35
5 まとめ	42

第3章

言語間の格差

渋谷勝己 ……45

1 言語の捉え方	45
2 世界の言語の社会的格差	47
3 多言語国家における言語間格差	50
4 変種間格差	54
5 社会的上位のことばへの対抗	58
6 言語間格差への対応	59
7 まとめ	60

第4章

標準語と方言

塩田雄大 ……63

1 「言語」「標準語」「共通語」「方言」	63
2 ガ行鼻音	70
3 「ら抜きことば」	73
4 言語運用の地域差	76
5 方言の変容・位置づけの変化：ネオ方言と新方言	80
6 ヴァーチャル方言・方言コスプレ	81
7 まとめ 方言の社会的地位の変化	82

第5章

ことばの性差

山下早代子 ……85

1 ことばと性	85
2 実際のことばの中に見る性差	89
3 性差のあることばの背景にあるもの	90
4 データで見ることばの性差	92
5 まとめ 性差のあることばのこれから	98

第 6 章

集団語

井上史雄・田邊和子……105

1 集団語の基本性格	105
2 集団語の位置付け	111
3 年齢集団の違い：年齢言語学	114
4 集団語の理論的展開	118
5 新しい「集団語」の時代	121
6 まとめ	123

第 7 章

敬語と社会

井上史雄……125

1 本章の位置付け	125
2 言語相対性と敬語 (第 2 章)	126
3 諸言語の敬語 (第 3 章)	126
4 方言敬語と日本語史 (第 4 章)	129
5 敬語の性差 (第 5 章)	129
6 集団差と敬語 (第 6 章)	131
7 敬語の歴史的発展 (第 7 章 1)	132
8 敬語の作り方 (第 7 章 2)	133
9 敬語の 3 分類と 5 分類 (第 7 章 3)	133
10 敬語の変化と場面差 (第 7 章 4)	136
11 敬語の誤用・受容・教養 (第 7 章 5)	137
12 敬語変化の傾向 (第 7 章 6)	138
13 敬語と文字 (第 8 章)	141
14 談話の敬語 (第 9 章)	141
15 談話と変異 (第 10 章)	142

第 8 章

日本語の文字 変異・政策・景観

笹原宏之……147

1 文字と社会	147
2 日本語の文字の要素と用法の多様性	148
3 日本語の文字を使用する場面による多様性	151
4 社会集団による多様性	157
5 まとめ	167

第 9 章

談話の規則性

小野寺典子 ……171

1 談話モデルと、談話の規則性を司る大・小ルール……………	171
2 談話の立体的構造……………	173
3 ポライトネス……………	174
4 グライスによる協調の原則・会話の公理……………	177
5 談話構造に見られる規則性……………	179
6 まとめ……………	188

第 10 章

談話と言語のバリエーション
その規則性と創造性

泉子・K・メイナード ……191

1 談話と言語……………	191
2 談話の分析と規則性……………	192
3 言語のバリエーションと創造性……………	195
4 間テキスト性・間ジャンル性……………	202
5 まとめ 談話とバリエーションの社会言語学……………	204

人名索引…………… 209

事項索引…………… 211

執筆者紹介…………… 215

社会言語学の枠組み 動向と展望

井上史雄

この章のポイント

本書では 10 章に分けて、社会言語学の諸分野を見渡す。論理的・系統的な順番に従って、網羅的に概説する。この章では本書全体の枠組みを示し、また最近の社会言語学の隆盛を確かめる。個々の術語については、後の章で詳しく触れる。

— 0 —

社会言語学とは

0.1 社会言語学の位置

社会言語学は、社会と言語の関係を扱う研究領域である。社会学と言語学との境界領域で、それぞれの研究分野の隣接科学の位置にある。かつては「すきま産業・アイデア産業」のイメージがあったが、社会学と言語学の両方に興味を持つ人が増えて、今は確立した研究分野になった。社会学と言語学、それぞれの領域の研究で、他の学問の助けを借りて明らかになる現象は数多い。

社会学と言語学のどちらを出発点におくか、または重点をおくかで、名称にはゆれがあった。初期には「言語社会学」とも呼ばれたが、言語学の下位分野であることを示すために、「社会言語学」という名称が広がった。

言語と社会の規定関係

堀江 薫

この章のポイント

この章では、言語と社会の相互関係を考える基盤として、サピア・ウォーフの言語相対性の仮説の学史的な位置づけと現在における再評価の動向、さらに言語と社会的要因（例：社会的認知や社会のサイズ、接触の密度）の相互関係を探究する多様な「類型論」のアプローチをケーススタディとともに紹介する。その上で、言語が社会や文化によってどのように規制を受けているか、異なる言語がどのように異なる社会的認知を表象しているかを実証的に裏付ける。

— 1 —

言語と社会・文化

エドワード・サピアは「いかなる2つの言語も、同じ社会的現実を表していると考えられるほど十分に類似しているということは絶えてない」(Sapir 1949; 筆者訳、以下断らない限り同様)と述べた。言語の構造に社会的要因がどのような影響を与えるかという「言語と社会の規定関係」は古くて新しい研究課題であり、現在でも議論が収束していない。本章では、この研究課題への接近法について、サピア・ウォーフの言語相対性 (linguistic relativity) の仮説や社会言語類型論 (sociolinguistic typology) など関連分野の研究成果を踏まえて考えていくことを目標とする。なお、言語相対性の仮説においては「言語と社会」というよりは厳密には「言語と思考と文化」の規

言語間の格差

渋谷勝己

この章のポイント

この章からは、社会言語学の柱のひとつであることばの多様性と変異の問題を取り上げる。言語であれ変種であれ、どの言語共同体にも「ことばの多様性」が存在する。そしてその言語や変種の間には「社会的な格差」があり、その共同体に「言語問題」をもたらしている。本章では、社会言語学という研究分野の基盤にあるこれらのキー概念を導入する。

— 1 —

言語の捉え方

言語学の入門書などでは、その冒頭に、「すべての言語は平等である」といった文言が記されることがある。このような考え方が明確に主張されるようになったのは、言語学が、それぞれの言語の特徴を個性として相対論的な見方で捉えることを採用した20世紀前半以降のことである。それ以前は、言語を、文明社会の発展した言語と、未開社会の未発達な言語に区別する見方が優勢であった。

20世紀前半という時期は、音素分析からはじまってボトムアップに言語の体系と構造を明らかにしていく構造主義の発展とあいまって、アメリカ先住民諸語をはじめ、世界のさまざまな言語が記述された時期であり、それぞれの言語にはヨーロッパのよく知られた言語とはまた別の種類の精緻なシステムがあるということが明らかにされた時期である。たしかに、音素や単語

標準語と方言

塩田雄大

この章のポイント

標準語・共通語と方言の位置づけを概観した上で、「ガ行鼻音(鼻濁音)」と「ら抜きことば」に関する地域差を取り上げる。また、現代における方言の使われ方と、方言の位置づけの変化について紹介する。標準語・共通語が広まったことによって、方言に関する新たなトピックや観点が生まれている。伝統的な方言そのものは変化・衰退したとしても、方言の背景と強く結びついた言語事象は、今後ともなくなるらない。

— 1 —

「言語」「標準語」「共通語」「方言」

最初に、「言語」「標準語」「共通語」「方言」について考えてみる。

ある1つのまとまった意思疎通手段 [=「ことば」] のことを、社会的な「機能・役割・位置づけ」の違いによって、「言語」と呼んだり、「標準語」「共通語」あるいは「方言」と呼んだりすることがある。言いかえると、この意思疎通手段が「言語」「標準語」「共通語」「方言」のいずれの呼称をもって扱われるものなのかは、おもに社会的な観点と取り上げる目的によって選択・決定されるものであって、内的な構造 [=「言語学」の取り扱うハードコアの部分] のみから決定することは不可能である。このような問題は、言語自体を(現実の社会の文脈から外して)いくら分析してみても、答えが出るものではない。

ことばの性差

山下早代子

この章のポイント

この章では、ことばに現れる性差について考える。女性と男性のことばづかいは違うと一般に言われているが、本当にそうなのか。両者を区別する特徴はあるのか、現代の人々の言語活動にもそれらは現れているのか、年齢などの影響はあるのか、ことばの性差は日本語独自の特徴なのか、差があるとすれば、それは自然発生的なものなのか外部的影響によるものなのか。本章ではそれらのことがらを取り上げて、ことばの性差を議論する。

— 1 —

ことばと性

1.1 女ことばと男ことば

社会言語学の研究分野では、性の違いとそれに伴うことばの関係は、“ことばとジェンダー”“言語と性”などのテーマで取り上げられることが多い。そこでは、男女の社会的な役割とその話すことば(語彙、表現、使用法など)の関係が追及される。日本語においてのことばと性の関係は、日本語には女性が使う“女ことば”と、男性が使う“男ことば”があり、それが日本語を特徴づけている、という見方が代表的である。

実際に次ページの図1の漫画『コボちゃん』の吹き出しにある会話を見よう。おとうさんの発話はいかにも男性らしく、おかあさんの発話はいか

第6章

集団語

井上史雄・田邊和子

この章のポイント

この章では、社会集団とことばの関係を扱う。集団語の性格、成り立ち、拡大・維持・衰退の過程を歴史的に位置づけ、集団語が形成される要因や、帰属意識との関係を扱う。社会集団によってことばが違い、一個人が場面によって使い分けることもある。本章前半では日本語の小集団に関する研究を紹介し(1～3節)、後半では西欧の社会言語学の関心が小集団に向かいつつあること(4節)、インターネットの普及でメディアに依存した集団語が発生していること(5節)を論じる。

— 1 —

集団語の基本性格

1.1 社会集団とことば

この章では、社会集団とことばの関係について扱う。一個人はいくつかの社会集団に属しており、所属集団にふさわしいことばを使う。集団語の使われ方は、規則の厳しいものからゆるやかなものまで連続体をなす。まず、社会集団の成員には帰属意識の強弱の違いがあり、集団語の使い方にも反映される。次に、集団語は成員に広がるとともに、他の社会集団にも広がることがあり、マスコミなどを通じて一般語化することもある。この章では理解の便のため、一般語化した(よく知られた)例をあげるが、記述内容の性質上、現在の若者に縁遠くなった語例も扱う。ことばの使い方により、話し手がど

敬語と社会

井上史雄

この章のポイント

これまでの章では、地表上に個人をプロットしたら使い手を識別できそうな違いについて扱った。敬語の章と文字の章は一個人内で使い分けられる現象を扱う。日本語の敬語は複雑なので、詳しく考察する価値がある。本書のほかの章と関連させながら、様々な面から考察する。

— 1 —

本章の位置付け

1.1 章の構成

この章では、入れ子細工・マトリョーシカのように、本書の全体構成を活用して記述する。つまり社会言語学の4分野の枠組みが敬語とどう関わるかを、具体的に記述する。全体を15節に分け、節の題名の右の()内に本書の章を示す。最初の3分の1は、第1章から第6章までと相互参照しながら記述する。敬語がテーマである第7章は6項に分ける。そのあと第8、9、10章に関わる現象について述べる。

1.2 敬語は多面的に社会を反映する（第1章）

敬語は多面体である。多くの面から考察し、位置付けることが必要である。敬語は何重にも社会つまり外界を反映する。また社会が敬語そのもの(言語体系)や敬語意識や使い方を規制する。

日本語の文字

変異・政策・景観

笹原宏之

この章のポイント

日本語を表記する文字は要素と運用法が極めて多様であるため、政策による規制がなされているものの、使用者が個々に選択、調整できる点が多い。そのため社会言語学の視点に立てば格好の研究対象が随所に見付かる。文字の使われ方は社会を多面的に反映する。

— 1 —

文字と社会

日本語は、文字種、用法、表記法ともに世界でも類を見ない多様で複雑なシステムを有しており、小さな集団や場面ごとの変異も豊富に現れる。このため、文字論を構築するには最適な環境にある(河野 1994)。文字の要素の種類が世界一多様であり、個々の字の運用法もまた多様性に満ちている。社会言語学の観点から広く見渡す価値がある。

文字種には、表意文字(実際には読みももつため表語文字)である漢字と、それから脱化した音節文字であるひらがな、カタカナをそれぞれ文字種として含んでいる。音素文字であるローマ字も使用する場面が少なからずあり、すべての類型を併用している極めて稀な文字体系をもっている。漢字の機能としては、音読みだけでなく訓読みもある。

談話の規則性

小野寺典子

この章のポイント

この章では、普段私たちがあまり意識せずに行っている日常会話に、規則性が驚くほど見られることを解説する。コミュニケーション全体に関わる大原則（ポライトネス・協調の原則・会話の公理）から、談話構成に関わる小規則（順番・隣接応答ペアなど）まで、大小の順に見る。

— 1 —

談話モデルと、談話の規則性を司る大・小ルール

談話の規則性については、学校教育の中で系統的に教えられることはほとんどない。敬語実用本で事例が断片的・散発的に取り上げられることはあるが、理論的裏付けがない。多くの人は実際に話していて、熟練労働として身に付けるが、個人差がある。談話の運び方は、人の注意をそらさない話し方、一人しゃべり、ぶっきらぼうな話し方、やさしい語りかけなど、様々なパターンで評価される。就職活動の面接で重視されるコミュニケーション能力も、この章で述べる談話の規則性と関連する。効果的・理想的な社会言語学的能力を身に付けるには、この章の中身をよく読むことが有効である。

談話研究は、言語学の語用論に分類されることも多かったが、人が社会の中で複数の社会的要因（男女差・年齢差・世代差・地域差など）を背負ってコミュニケーションを行っていることを考えても、当然、社会言語学の枠組みの中でも捉えられる項目だろう。本章では、社会言語学の2大潮流であ

談話と言語のバリエーション

その規則性と創造性

泉子・K・メイナード

この章のポイント

この章では、談話と変異（言語のバリエーション）に観察される言語の諸相に焦点を当てる。談話における「は」と指示詞の考察からは言語の規則性が、キャラクター・スピーク、方言、語りのスタイル、間ジャンルの考察からは、創造性が明らかになる。テレビドラマ、ライトノベル、小説などのポップカルチャーをデータとし、広義の社会言語学のアプローチを通して分析・考察することで、日本の言語文化において演出され商品化される談話現象についての理解を深める。

— 1 —

談話と言語

社会言語学の重要概念として、談話（第9章）と変異（バリエーション）（第3-8章）があるが、両者の融合するところに興味深い現象が観察できる。談話分析では、文の文法では説明が困難な言語の現象を、談話の構造と運用に基づいて分析・考察し、新しい規則を発見してきた（第9章参照）。一方、談話の規則をあえて突き破り、バリエーションとして、創造性豊かな表現手段として使うことも多い。特に、より自由が許されるジャンル、ポップカル